

## やはり昭和の歌が好き

7組 山本 哲照

### 口から出てくるのは「玄海ブルース」

私は歌が好きで一人での時によく自然に何かの歌を口ずさんでいます。ごくまれにポップスだったり、昔のCMソングだったり、クラシックの歌曲やオペラのアリアだったり（見栄張るな！）しますが大体は歌謡曲、それも演歌が多いかな？どんな歌かと申しますと、昭和時代それも昭和20年から30年代半ばまでの男性歌手の歌が多いですね。頻繁によく口から出てくるのは「♪情け知らずと笑わば笑え 人に見せない男の涙・・・♪」という文句でこれはバタヤンこと田端義夫の「玄海ブルース」（昭和24年）という曲です。私は小学校に入った頃（昭和22年）から家のラジオや巷間どこからか聞こえてくる当時流行った歌をいつの間にか覚えて自分でもよく歌っていました。小学校時代に流行った歌で今でも特に印象に残っている歌を古い順に列挙してみます。これだけが流行った歌のすべてという訳ではなく、私の好みのもものばかりですから「あの歌が抜けている」とか「この歌がないのはおかしい」などと言う異議や苦情は一切受け付けません！

### 小学校時代によく聞いたのは・・・

「かえり船」田端義夫（21年）、「啼くな小鳩よ」岡晴夫（22年）、「異国の丘」竹山逸郎、中村耕造（23年）、「湯の町エレジー」近江俊郎（23年）、「憧れのハワイ航路」岡晴夫（23年）、「あざみの歌」伊藤久男（25年）、「白い花の咲く頃」岡本敦郎（25年）、「上海帰りのリル」津村謙（26年）、「高原の駅よさようなら」小畑実（26年）、「越後獅子の歌」美空ひばり（26年）、「野球小僧」灰田勝彦（26年）、「山のけむり」伊藤久男（27年）、「芸者ワルツ」神楽坂はん子（27年）、「街のサンドイッチマン」鶴田浩二（28年）、「落葉しぐれ」三浦洸一（28年）、「お富さん」春日八郎（29年）、「高原列車はゆく」岡本敦郎（29年）

### 岡本敦郎と新井恵子

※「あざみの歌」「白い花の咲く頃」「山のけむり」「高原列車はゆく」は流行歌と言うよりも当時NHKラジオの「ラジオ歌謡」で放送された曲で、特に岡本敦郎は他に「さくら貝の歌」（24年）「リラの花咲く頃」（25年）「あこがれの郵便馬車」（27年）「チャペルの鐘」（28年）「ピレネーの山の男」（30年）「自転車旅行」（31年）などラジオ歌謡からヒットを連発していました。私は彼の声量や声質などからどんな容姿なのかいろいろ想像をたくましくしていましたが、実際の画像を見て想像との落差に唖然としたことをよく覚えています。それは女性歌手の荒井恵子も同様でした。ラジオから流れてくるあの美声に「どんな美人だろうか？ぜひ顔を見たい」と胸を焦がしていましたが、写真を見て百年の恋が一瞬で醒めてしまいました。今から60年以上も昔の話ですが、勝手に想像して勝手にがっかりしたことをお詫びします。天国の岡本さん、荒井さんゴメンナサイ。

## 春日八郎と鶴田浩二

私は歌謡曲の中でもやはり演歌が好きですね。女性歌手の歌の中にも勿論好きな曲はありますが、やはり男性歌手の曲を好みます。昭和20年代当時の芸能雑誌「平凡」と「明星」の人気投票で男性歌手のトップ3は岡晴夫、小畑実、田端義夫でした。近江俊郎は戦後最高の売り上げ枚数を記録した「湯の町エレジー」の大ヒットで一時トップ3に並ぶ人気でした。これらの男性歌手の曲ももちろん好きでしたが私が当時から現在に至るまでずっと好きな歌手は春日八郎と鶴田浩二です。春日八郎は艶やかな高音の伸びと歌のうまさ、鶴田浩二はしっとりとした声と映画で鍛えた説得力のある歌唱が魅力です。昔はレコード今はCDでこの二人の歌を楽しんでいます。二人の歌の中で一番好きな歌は春日八郎は「妻恋峠」（作詞・東條寿三郎、作曲・中野忠晴、30年）、鶴田浩二は「赤と黒のブルース」（作詞・宮川哲夫、作曲・吉田正、30年）。

## カラオケで歌いたい歌

カラオケは特に好きという訳ではなくて最近3、4年一度もやった記憶はありませんが昔は親しい仲間と泊りがけで温泉などに行ったときは必ずカラオケルームを予約してみんなが自慢のノドを競い合ったものです。私がカラオケで好んで歌う歌を順不同で上げてみます。

### 演歌

- 「風雪ながれ旅」（詞・星野哲郎、曲・船村徹、歌・北島三郎、55年）
- 「おゆき」（詞・関根浩子、曲・弦哲也、歌・内藤国雄、51年）
- 「望郷酒場」（詞・里村龍一、曲・桜田誠一、歌・千昌夫、56年）
- 「上海帰りのリル」（詞・東條寿三郎、曲・渡久地政信、歌・津村謙、26年）
- 「街のサンドイッチマン」（詞・宮川哲夫、曲・吉田正、歌・鶴田浩二、28年）
- 「一本刀土俵入り」（詞・高橋掬太郎、曲・細川潤一、歌・三橋美智也、32年）
- 「赤いランプの終列車」（詞・大倉吉郎、曲・江口夜誌、歌・春日八郎、27年）
- 「高原の駅よさようなら」（詞・佐伯孝夫、曲・佐々木俊一、歌・小畑実、26年）
- 「港夜景」（詞・木未野奈、曲・大野弘也、歌・細川たかし、53年）
- 「霧にむせぶ夜」（詞・丹古晴己、曲・鈴木淳、歌・黒木憲、43年）
- 「なみだの操」（詞・千家和也、曲・彩木雅夫、歌・殿さまキングス、48年）
- 「奥飛騨慕情」（詞・曲・歌・竜鉄也、55年）
- 「無錫旅情」（詞・曲・中山大三郎、歌・尾形大作、61年）

### 歌謡曲

- 「あざみの歌」（詞・横井弘、曲・八洲秀章、歌・伊藤久男、25年）
- 「山のけむり」（詞・大倉芳郎、曲・八洲秀章、歌・伊藤久男、27年）
- 「踊り子」（詞・喜志邦三、曲・渡久地政信、歌・三浦洗一、32年）
- 「高校三年生」（詞・丘灯至夫、曲・遠藤実、歌・舟木一夫、38年）

他にも何曲かありますがキリがないのでこの辺でやめておきます。ただ、誤解する向きがあるかもしれないので敢えて補足しますと、カラオケを始めたならこれらの曲をすべて完全に

歌うという訳ではありません。もしそうなったらそれこそよく言われる「マイクを握ったら離さない」と言う状態になって、同席している者たちの「ひんしゅく」を買ってしまいます。この中の何曲かを歌わせて頂ければそれで十分です。

### セリフ入りの歌は一人のときに・・・

最後にもう一つ蛇足を付け加えることをお許しください。以下の曲に共通することがあります。それは何かお判りでしょうか？

「青い夜霧の港町」(詞・大高ひさを、曲・上条たけし、歌・大木実、30年)

「ガード下の靴みがき」(詞・宮川哲夫、曲・利根一郎、歌・宮城まり子、30年)

「大利根無情」(詞・猪又良、曲・長津義司、歌・三波春夫、34年)

「月の法善寺横丁」(詞・十二村哲、飯田景応、歌・藤島恒夫、35年)

「傷だらけの人生」(詞・藤田まさと、曲・吉田正、歌・鶴田浩二、45年)

「無法松の一生 度胸千両入り」(吉野夫二郎、古賀政男、歌・村田英雄、32年)

「あばれ太鼓 無法一代入り」(詞・たかたかし、曲・猪俣公章、歌・坂本冬美、62年)

それは、歌の合間にかなり長いセリフが入ることです。いずれの曲も私は大好きですが、カラオケで歌う時にはあまり向いていないように思えます。せっかくメロディの部分ほうまく歌えても、セリフの部分がうまくしゃべれず、歌全体をぶち壊してしまうことがあるからです。これらの歌は風呂場で浴槽につかりながら、頭に手拭いを乗せて目をつむり、大声で歌うしかないようです。「無法松・・・」と「あばれ太鼓・・・」はセリフではなく、七五調の歌詞に全く別の曲に転調したかのようなメロディをつけたもので浪曲のようでもあるし、いずれにしても完全に覚えるのは大変です。もっともこの2曲は最初に発売された普通に1番から3番までの歌詞のバージョンもありますから、カラオケで歌いたければそっちを歌えばいいだけの話なんですけどね。

お後がよろしいようで・・・お粗末さまでしたっ！